

令和6年度

小金井平和の日記念行事

# 「平和作文集」

小金井市

## はじめに

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を3年ごとに行っています。昭和28年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年12月20日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和35年10月3日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和57年4月1日には、世界で唯一の核被爆国として、また、平和憲法の本質からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和54年3月20日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「平和行事参加の旅」、「非核平和横断幕」、「原爆パネル展」、「非核平和映画会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和首長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成26年12月18日に戦後70年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づいて実施した平和の日記念行事における作文コンクールの応募作の中から4編を選定し、文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にしていいただければ幸いです。

令和7年3月

企画財政部広報秘書課

# 目 次

○小金井平和の日記念行事作文コンクール

## 【入賞作文】

### 小学生の部 大賞

「平和の『和』のわたし」

高橋 和央（小金井第一小学校 3年生）・・・・・・・・・・ 1

### 小学生の部 優秀賞

「ぼくの平和宣言」

谷 昌悟（小金井第四小学校 4年生）・・・・・・・・・・ 3

### 中学生の部 大賞

「学ぶことから平和の実現」

ランダマン 鈴（東中学校 2年生）・・・・・・・・・・ 5

### 中学生の部 優秀賞

「伝えることの大切さ」

中村 優月（東中学校 2年生）・・・・・・・・・・ 7

## 小学生の部 大賞

「平和の『和』のわたし」

高橋 和央（小金井第一小学校 3年生）

わたしの名前は「わお」といいます。

よく、

「どんな漢字を書くの？」

と聞かれるので、わたしは

「平和の『和』に中央の『央』です。」

と答えています。

でも、今まで自分で「平和の『和』です。」と言っていたけれど、平和って何だろうと考えたことは、ほとんどありませんでした。それは、今、自分が平和な所にいるから考えた事がなかったということに気がつきました。

わたしにとって、平和とは家族とえ顔でいっしょにいることと、友達とたくさん遊ぶことです。

でも、せんそうがあったら、当たり前だったことができなくなるかもしれません。ニュース番組を見ると、世界のあちらこちらで、今でもせんそうをしています。こわれた建物の前で泣いている人達のえいぞうを見ると、とても悲しい気持ちになります。

この前は通っている小学校の校庭からしょういだんというばくだんが発見されると校内放送が流れました。

わたしはようち園のころまで、テレビでせんそうのえいぞうが出ると、いつも白と黒の色でしかうつっていなかったので、せんそうのあった時代は今よりもっと大昔のことで、世界には白と黒の二色しかなかったと思っていました。

でも、小学生になってニュースでみたり、校庭からばくだんが見つかったと聞いたりして、せんそうは白と黒の世界の中で起こったのではなく、今と同じようなカラフルで青い空の下でも起こっていたことが分かりました。そして今日も世界のどこかで悲しいあらそいをしています。

去年の秋に、とても空の色と雲の形がきれいな日がありました。

お母さんが、

「これはひつじ雲っていうんだよ。」

と言って写真をとっていました。

すると、自転車に乗っていた外国の男の人が自転車からおりて空を指さしながら英語でお母さんに何か聞いています。お母さんは英語は話せないはずですが、何かしゃべって、二人で話がつうじていそうです。あとから聞いてみると

「何で写真をとっているんですか？」

と聞かれたので、

「空の色と雲がとてもきれいだからです。この雲は日本では、ひつじ雲と言って秋に見える雲なんですよ。」

と、かんたんな英語で伝えたそうです。そうしたら意味を分かってくれて「シープクラウド！オー、ビューティフル！」

とよろこんでくれてわたしもいっしょに三人でえ顔になってバイバイした思い出があります。

その時、わたしははじめて外国の人と話をしたのですが、同じものを同じ気持ちできれいだと思ってくれて、平和だなあと思いました。こういう時間が世界中で起きてくれればせんそうは少なくなるんじゃないかと思いました。

平和の『和』の字を持っているわたしは、平和のために何ができるんだろうと考えました。まだ小学三年生なのでむずかしいことはできませんが、今わたし達が当たり前だと思っていることが当たり前ではない人たちが世界にはたくさんいるということをおすれてはいけないと思います。

そして、世界のずっと遠くまで続いている青い空を、ばくだんが落ちてくる空ではなく、え顔できれいな空だと同じ気持ちで見られるような日が一日も早く来るようねがっていこうと思います。

## 小学生の部 優秀賞

### 「ぼくの平和宣言」

谷 昌悟（小金井第四小学校 4年生）

広島は、平和の時計とうを知っていますか。平和公園にあるその時計とうの音が、夏休みをそばの家ですごすぼくの耳に毎朝聞こえてきます。このチャイムのメロディーが、毎朝8時15分に鳴ります。8時でも8時半でもなく、8時15分。ぼくはふしぎに思いましたが、だれも気にする様子はありません。調べてみると、その時間は原子爆弾の落ちた時間でした。気になったのはぼくだけで、このまちに住む人は原爆の記憶とともに生活をしているのです。

原爆投下から79年の今年の夏、ぼくは原爆資料館に行ってきました。展示されたつぎはぎの服、かべにうつる黒い人かげ、はがれたつめやはだ。二度とこんなことは起きてほしくない、とぼくは思いました。テレビえいぞうで見ただけでは伝わらない、現地に行くからこそ感じられるものが、そこにはありました。

広島は友達にさそわれて、「原爆死没者いれいぼんおどり大会」にさんかしてきました。開さいされた本川小学校は、校舎が原爆にたえ資料館となり、広島原爆いせきとして国の史せきに指定されています。正門を入ると左手にいれいひがあり、そのまわりを生徒達がつくったたくさんのとうろうがかこんでいました。ぼんやりと光ってとてもきれいでした。ぼんおどり大会はすごくにぎやかで楽しかったです。ひびく音や声が今はとっても平和なんだと伝えているような気がしました。

平和記念式典の子ども宣言を聞きました。「ねがうだけでは平和はおとずれません。色あざやかな日常を守り、平和をつくっていくのはわたしたちです。」という言葉聞き、同じ小学生の言葉とは思えませんでした。ぼくにもできる、平和への一歩。広島の人達が伝えてくれる正しくせん明なじょうほうを、ぼくもきちんととらえて考えていかなければいけないと思いました。大きなことは出きないけれど、自分の身近な平和を作っていくことからはじめ、平和を広げていくことが大切なんだと学びました。

8月6日の夜、ぼくはどうろう流しをしました。和紙に「いつまでも平和な日がつづきますように」と書いて、川から流しました。川の潮の満ち引きによって、原爆ドームの前をゆらゆらと行き来するとうろうを、しばらくみんなでながめました。戦争をけいけんしていないぼくたちが、今をあたり前だと思えることこそが平和なのです。これからも広島に行き、現地の声を聞いていろいろと知り、学んでいきたいと思います。

## 中学生の部 大賞

「学ぶことから平和の実現」

ランダマン 鈴（東中学校 2年生）

私は、世界で戦争が起こってしまっていること、世界には不幸な人がたくさんいるという事実を背を向けながら生きてきた。道でホームレスの人がいるとき、私は怖くなり、目を背けてしまっていた。中には私と同じ年の女の子や、それよりも小さな子どもたちが泣いている映像もある。授業で見た動画では、背中が真っ赤に焼けている子どもたちの姿や、体がボロボロになりながら運ばれている人の様子が映っていた。私は自分の過ごす世の中でこんなにもひどい戦争に苦しんでいる人がたくさんいることが信じられなかったし、信じたくなくて、目を背けてきた。自分の手に負えないようなことで何万人もの人が苦しんでいて、どうにもならないことが怖かったのだ。

しかし、自分の信じたくない事実から逃げていてもどうにもならないということを学んだ。マララ・ユスフザイの「私はマララ」という、彼女がタリバン支配下のパキスタンで教育のために立ち上がったことについての本を読んだ。マララは、小学生の時から「これはおかしい」と思い、自分の国の自由のためにできることを尽くしてきた。彼女はいつでも

「学ぶことが一番大切」

と言っていた。つまり、私なりに解釈すると、知らないと何も始まらないのだ。私にできる平和への貢献は、知ることから始まるかもしれないという考えに至った。

私にまずできることは、戦争の現状について知り、被害にあっている人の苦しみを自分事としえ捉えることだと思った。例えば、最初は戦争をするよりは命のほうが大事なんだから戦争なんか終わらせればいいと思っていたが、授業でウクライナの人にインタビューをしている動画を見て、そういうことでもないということを知った。ウクライナが降参してしまったら、ウクライナという国もなくなり、文化も失われてしまうのだ。したがって、戦争という手を選びざるを得なかったのだ。私自身も、日本という



国が突然なくなってしまう、着物も、寿司も、日本語も存在しない文化になっちゃったら言葉に表せないほど辛いと思う。しかし、戦争で大切なものを失ってしまうのもすごく嫌だ。

戦争や、世の中で起きている嫌なことに目を向けず、視野を狭くしていたら自分は平和な人生を送れるかもしれない。私は今までそれを望んでいた。しかし、視野を広げ、戦争国の人々はどんな苦しみを味わっているのか、また、現在の戦争も過去に起きた戦争もなぜ起こってしまったのか、そのようなことに目を向けることで考え方が変わった。戦争が人々をどんなに苦しめるか、それでも戦争を起こしざるを得ない理由もあることに気が付けた。世界みんなが戦争の恐ろしさを理解できれば、戦争はなくなるのではないかと私は思う。一人一人が戦争について学び、平和を願うような世界になってほしいと思う。

## 中学生の部 優秀賞

「伝えることの大切さ」

中村 優月（東中学校 2年生）

スタジオジブリによって映画化された野坂昭如の短編小説「火垂るの墓」。この映画が一部の国を除き9月16日、世界に発信されたとSNSで話題になっていた。

「火垂るの墓」は野坂さんの戦争経験を元に書かれた、生にしがみつこうとする兄妹の物語だ。私は昔一度だけこの映画を見たことがある。怖くて恐ろしくて、こんなことが現実でおこっていたとは信じられなかった。

この映画が世界に発信されたとき、X（旧Twitter）ではトレンド入りしていた。気になってみてみたら、アメリカ人の感想が目に入った。「戦争は間違いだった」「この映画を見たあとしばらく立ち上がることができなかった。」といった感想が沢山上がっていた。私が見た感想の中で一番目に留まったのは「この映画は、戦争映画とはまったく異なる。戦争を美化せず、その犠牲者、特に子供たちがどれほどの苦しみを味わったかを描いているのが新鮮だった。」という感想だった。この感想の中で私が疑問に思ったところは「新鮮だった」という言葉だ。なぜ、「新鮮だった」のか。アメリカでは犠牲者の苦しみを映画が新鮮なのか。疑問は沢山あった。

だから、私はアメリカの戦争映画を観てみた。何本かの映画を見て、私が感じたのは「英雄の冒険譚のようだな」だった。戦闘シーンが多くどれも英雄的に描かれていた。これをみて私は「新鮮だった」という感想の意図がわかり、なんとも言えない気持ちになった。

伝える、ということは歴史を繰り返さない必要なことだと私は思う。そこに誤りがあってはいけないし、それを伝えることはやめてはいけないのだ。けれど、伝え方が違うだけで捉えられ方というのは大きく変わる。「火垂るの墓」での乾燥がすべてを物語っていると感じた。

そもそも戦争には加害者、被害者が曖昧なことが多いのに、英雄的に自国を描き、それを堂々と国内、国外に発信するなど決して善い行いとは言

えないだろう。第二次世界大戦での日本は決して被害者側だとはいえないしアメリカが加害者側だとも言えない。だが、それと同じくらいアメリカが正しいことをしたとも言えない。他の国でもそうだと私は思う。現在も続いているガザ地区の戦争だってどちらにも被害者はいるのだ。親を殺された人や子供を失った人、恋人や友人を失った人だっているのにどちらかが悪いと決めつけ、それを後世に伝えていくなんて恥だ。愚かで情けない。されたことを繰り返し伝えるのではなく、してしまったことを先に伝えるべきなのではないだろうか。

平和とは犯した過ちを振り返り、戦争という愚かな争いを二度と起こさせないように伝えることで保たれていく。されたことだけを永遠に伝えていくのならそれは平和への冒涇だ。

日本は広島や長崎に原爆を落とされたことを伝える前に、何をしたのかを英雄的にではなく事実として俯瞰して記録することが大切だろう。

アメリカは英雄的に描くことをやめ、過ちを過ちとして認めること。そして二度とこんなことがないように正しいことを伝えることが大切だ。

現在戦争を続けている国があることも考えて、私達が今できることは戦争が間違っていると必死に叫び続けることだろう。

なにより核の排除や平和条約よりも先に、まず過ちを認めること、そしてその過ちを伝えていくこと。これこそが平和への第一歩だと、私は思う。

## 平和作文集

発行 令和7年3月  
小金井市

編集 小金井市企画財政部広報秘書課広聴係  
小金井市本町六丁目6番3号  
☎042-387-9818